

それでは、もろもろのそういったことはこのようなシンポジウムもそうなのですが、多くの人に知るきっかけとか、知っていただいてなんぼということでありまして、知らないと話が次の展開に進まない。ですから何度も言いますが、こういった普及版ということもあったりしますが、その中で具体的に曲田先生は日土小学校のご苦勞もされたわけですが、そういった保存検証について幾つかアドバイスの話をお聞かせいただければと思うのですが、4、5分構いませんか。

○曲田 基本的なところは伊東先生から全部お話いただいているわけですが、私なりに復習してまとめます。1つ目は抽象的なことですが、地域の人々に愛される建物であることが非常に重要である。これは価値を超えてなのかもしれません。極端なことを言いますと、古いものであちこち朽ち果てつつあっても。そうでなければそれを残してみんなで使い続けようとはしないし、いつの間にか知らないうちに壊されて新しいものになってしまう。愛されるというのは思い出がきちんと残って、現在も何とか使いながらやっているということの一つの象徴的な言葉として使っていただいても結構だと思います。そのためには使い続ける工夫が必要です。愛すべき建物であつたら寄つてたかつて大事にしようということ。これは我々が色々と学校の保存再生活動をしていく中で学んだことですが、みんなで寄つてたかつてというのは、ああ使おう、こう使おう、こういう行事に使おうとかそんなことをやっていくことが大事なのではないかと思っております。それから、地域資源としての活用方法ということで、積極的公開ということも大切で、宇和の開明学校はそういうことに寄与しています。もちろん文化庁自身、地域社会に対しての公開が大事ですと言っているわけです。開明学校の近くに日本一廊下の長い学校がありますが、そこではZ-1（ジーワン）レースという雑巾レースもありますし、そういうものを含めて楽しめる工夫を行っていくことが必要であろうということです。継続して使おうということは伊東先生のお話にも出てきました。県庁舎もずっと使うはずでしょうし、伊予銀八幡浜支店にしてもそうです。それ以外のところも基本的にできる限り補修しながら、使い続けることです。そのことがエコにも繋がっていくわけですからそのことをきちんとやっていく。道後温泉ももうじき補修に入りますけれども補修して使っていく。それから学校や

講堂などもそうした可能性をたくさん残しております。子どもが減っていくということはさておき、特に学校施設は地域の資産であることについて考慮していくことが大切なのではなからうかと思えます。



愛媛大学南加記念ホール

ところで皆さん、この建物（南加記念ホール）自身も昭和28年建築のものです。それをリフォームしてこういうふうになっているんです。まるで見違えました。これは南カリフォルニアに移住した愛媛県の方々が教育のためにお金を使ってくれということで、愛媛大学に寄付してこれを建てたということです。長い間、ここは卓球練習場と演劇練習場という場所でした。取り壊すのではないかと思っておりましたが、そうはならずにこういうリフォームの仕方もあるということです。それは例えば内子ビクターセンターもそうしたもののひとつですし、先ほどお見せした旧日本銀行岡山支店がルネスホールという音楽ホールに変わったという事例もご紹介します。

最後に、建築や町を素材にした学習必要性ですね。それは子どもから大人までいろいろ含みますが、そういう学習を続けることによって、人々にさらに愛されて残っていくのではないかと思います。伊東先生のお話で出てきた産業遺産だけではなくて、ありとあらゆる生活部面で続いてきたもの、祭りなども実はそうなんです。そういうことも含めて続ける、持続する、そうした営みが、愛される建物・美しい空間づくりにつながっていくと思っております。さて今、少し関わっているのが役場庁舎（鬼北町）です。これも華奢な建物なのですが、何とか残っていく道筋が今できつつあります。ここは行政も主導的にやってくれるのですが、行政、住民、いろいろな民間団体などが連携しながらやっていく。それが伊東先生も使われましたが、「今でしょ、とにかく始めましょう」ということになるのではなからうかと思っております。